季刊 じぱ

Japan Intellectual Property Association

理事's eye

鹿嶋 慎一郎　日本知的財産協会 副理事長（2023年度）
前 中国電力株式会社 エネルギア総合研究所 知財部長

わが社のこだわり

Spiber 株式会社

Contributing to sustainable well-being

ZOOM UP

国際第４委員会

JIPA通信

2024年度「会員代表の集い」のご案内

Summer
2024
VOL.30

「情報発信」への参画を通じた成長

2023年度に85周年を迎えたJIPAは、日本における知財のプラットフォームとしての役割を果たすため、「研究･提言」、「教育･研修」、「情報発信」そして「グローバル対応」という4つの活動を積極的に展開しています。

私は、2019年度に理事を拝命以降、各会員企業社員の参画で構成されるJIPAの各専門委員会のなかで「情報発信」の一翼を担っている会誌広報委員会を担当していました。

会誌広報委員会は、機関誌「知財管理」や「季刊じぱ」の企画･編集･運営を行い、協会活動の成果を広く会員内外に発信することを目的に活動しています。このうち「知財管理」については、1951年JIPAの前身である重陽会の会報として発行されて以来、実に73年の長きにわたり会員相互の研鑽･交流のための情報誌としての役割を持つとともに、専門性の高い論文や企業における最新の知財活動を掲載する知財関係の専門誌として、知財の実務家や専門家にとってなくてはならない雑誌として評価をいただいています。

このクオリティの源泉には2つの持続的な取組みがあります。一つは、JIPAの各専門委員会が、その時々において質の高い知的財産に関する調査研究を継続し、その成果を論文として形にしてきていること、そしてもう一つは会誌広報委員会がJIPA事務局と連携しながら、先々のことも見据えた企画編成を継続していることです。

企画編成にあたっては、各委員がそれぞれの派遣元企業などで培ってきた各々の知財スキルをベースに知財の諸問題や実務遂行上の課題を論説企画として落とし込んでいく必要があります。2023年度は初の海外取材企画も行いました。なかなか大変ですが、この過程を様々な業種で構成される各委員が、規律は保ちながら、上下関係を気にすることなく、自由闊達に議論することで有益な論説企画に仕上がっていきます。この企画編成の議論の輪に参画することで、JIPAの「情報発信」の一翼を担うことに加え、この経験が各委員の成長となり、派遣元企業での企画力向上や有益な人脈形成といった貢献につながるものと思います。

理事's eye
No.009

「JIPA理事としての視点」「知財部門のリーダーとしての視点」2つの視点で深掘りする知財業界の今

鹿嶋　慎一郎　日本知的財産協会　副理事長（2023年度）
Shinichiro KASHIMA　前 中国電力株式会社　エネルギア総合研究所　知財部長

未来を創る知財リーダーの勇気

現代社会において、カーボンニュートラル（以下 CN）への取り組みとデジタルトランスフォーメーション（以下 DX）の進行は、新たな成長の機会であるとともに企業活動における不確実性を一層高めています。例えば、私が所属する業界では、CN政策により、従来の電源インフラ構成から、非効率な石炭火力を廃止し、バイオマス混焼など火力発電のトランジションおよびCN電源の活用を拡大するなど、ビジネスモデルの急速な変化が進められています。

またDXにおいて、最近特に注目するのは、生成AI技術の台頭です。この技術は、業務の効率化はもとより、職場の役割や仕事の内容にも大きな変化をもたらす可能性があります。CN、DXによるこれらの変化は、知財部門にとっても、既存のアプローチを見直し、新しい知財活動の構築を迅速に進めることが求められていると感じています。

知財リーダーに求められるのは、このような変化を敏感に察知し、必要な場合は思い切ったギアチェンジを行う勇気です。未来からバックキャストしてありたい姿を見通し、そのありたい姿に基づき行動を起こすことが、今日のビジネス環境では重要です。この取り組みが成功を完全に保証するわけではありませんが、方向性の確度を向上させることができるのではないかと考えます。

加えて、知財業務に関わる各個人の成長も重要です。技術やビジネス環境の変化に応じたリスキリングと行動により得た経験は、知財部門の社員一人ひとりの価値を高め、全体としての組織力を向上させることに繋がります。組織全体でのこうした行動の経験は積み重なるものであり、この経験値の蓄積は計り知れない価値があると言えます。

この変革の時代において、知財部門は法的保護の役割に加え、企業戦略の一端を担う意識が必要です。企業の成長に貢献するために、どのように進化し、どのように社内各組織の事業変化に応じた伴走支援を進めるかが、私たちの大きな課題となります。

これからの知財リーダーは、変化を敏感に察知し、失敗を恐れず新しい取り組みに臨む行動力が益々必要になるものと考えます。

わが社のこだわり ［Spiber 株式会社］

Contributing to sustainable well-being

菅原 潤一 *Junichi SUGAHARA*
Spiber株式会社　代表執行役

Spiberは2007年創業のスタートアップです。カシミヤ、クモの糸、動物の皮やお肉にいたるまで、自然界に存在する優れたタンパク質からの学びを活かした新素材を工業的に、より低コスト・低環境負荷で生産するためのテクノロジーを開発してきました。近年は量産工場を立ち上げることに成功し、本格的な商業生産が始まっています。この素材は主原料を石油に依存しないこと、生物循環性を有すること、動物を使うよりも様々な点で環境負荷が低いことなど、高い環境性能を誇ります。私たちは事業を通して、循環型社会の構築、そしてその先にある人々のウェルビーイングに貢献したいと考えています。

タンパク質素材の魅力と可能性

タンパク質（Protein）は生物が採用する基幹素材の一つであり、20種類のアミノ酸が連結してなる高分子です。驚くべきことに、どの種類のアミノ酸をどの順番で何個並べるかが遺伝子によって精密にコントロールされており、その結果、タンパク質は時に髪の毛になったり、お肉になったり、酵素になったりします。自然界を観察すれば多様な機能を持ったタンパク質が無数に存在し、その中には鉄よりも強靭なクモの糸など、人類の素材科学の歴史では到達できなかったようなものも含まれます。

私たちSpiberはこの夢の高分子であるタンパク質を、微生物発酵（Brewing）の力を使って工業的に、低コスト・低環境負荷で生産するためのバイオテクノロジーの開発に取り組んできました。実験の自動化や情報科学を効果的に取り入れた最先端の研究開発の推進に加え、研究開発から製造まで一気通貫した設備や体制を構築し、微生物によるタンパク質生産のプロセス最適化を15年以上かけて実現してきました。

タンパク質素材の応用先は多岐にわたりますが、第一に集中している事業領域のひとつがアパレル・ファッション産業です。アパレル・ファッションは世界で2番目に大きな経済活動とも言われる巨大産業であり、環境に与える負の側面がクローズアップされるようになりました。私たちの開発した微生物由来のタンパク質「Brewed Protein™」素材を使っていただくこと、また微生物を用いた物質生産の循環システムを実装することで、アパレル・ファッション産業全体のサスティナビリティの向上に寄与できればと考えています。

スタートアップこそ知財戦略

多くのスタートアップが目指すのは新産業の創出であり、知財の競争環境もブルーオーシャンであり得ます。オセロで言うと角を取って圧倒的優位を築ける状態であり、故にスタートアップにとって知財戦略は極めて重要な経営戦略になり得ます。

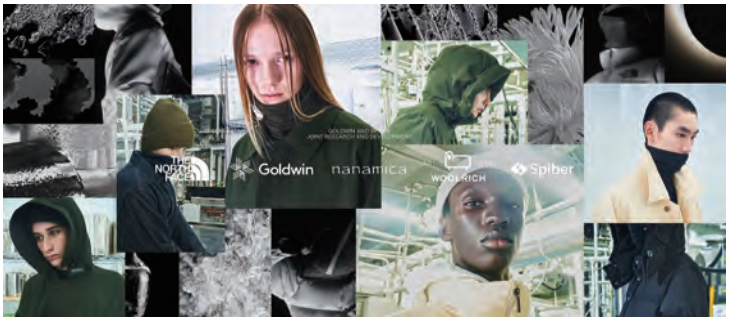
Spiberでは知財管理を専門に行う部署をかなり初期の段階から立ち上げていたのみならず、経営戦略と知財戦略を結びつける機能として「知財委員会」を設置し、経営者や開発部門担当役員と月に一度、知財管理状況（自社の特許出願戦略や他社動向等も含む）を報告・議論するような仕組みも取り入れてきました。これらは効果的な特許出願、維持、移行国判断等に寄与していると思っています。

私たちは量産工場を立ち上げる際、知財の価値を信用の基盤とした数百億円規模のデットファイナンスを実施しました。研究開発に投資した成果が実行性のある知的財産としてしっかりと蓄積・管理されていたからこそ、このようなスキームの実現に繋がったと考えています。

JIPAとの関わりと期待

JIPAが運営している研修は知財実務者に参考になるものが多く、受講料もリーズナブルでスタートアップにはとても助かります。JIPA参画企業間のネットワーク形成も、同業他社の皆様がどのようなことで悩まれているのかなど、信頼関係の中でフランクに情報交換させていただくことができ大変役立っておりますし、今後もこのような横連携機能の提供に期待いたします。

Spiberタイ工場



Brewed Protein™採用事例（Source: Goldwin Inc.）

ZOOM UP

国際第４委員会

橋元 達也
Tatsuya HASHIMOTO
日本知的財産協会 国際第4委員会 委員長
ポッカサッポロフード＆ビバレッジ株式会社
企画・知財グループ

「敬う心」と「仲間」を大切に、実務者視点と運用実態にとことんこだわって旬な情報を発信します！

国際第４委員会では、「敬う心」を大切にしながら、特許権を軸に、インドやASEAN、中東、オセアニア諸国を対象に調査研究を行い、実務者視点と運用実態にとことんこだわった情報発信や課題提言を行っています。調査研究においては、現地で新鮮な情報を取ってくることにもこだわっており、国際第４委員会としてはこれまで12か国へ調査団を派遣してきました。

また、国内での対外活動も積極的に行っており、直近の活動としては6月5日に開催されたタイ知的財産局（DIP）の実務者対話等に参加して意見発信を行いました。他委員会や組織とも活発に連携・交流を行っており、これまでに国際第1～3各委員会との国際合同委員会をはじめ、グローバル模倣品対策WG・JETRO5極との合同会合など委員会の枠を超えて活動しています。

委員会活動としては、委員メンバー各社の会議室を会場としてご提供いただき、毎月全体委員会を開催しています。全体委員会の中では、全員主役として主体的に調査研究を推進していただくだけでなく、「学びの時間」として、他社の事業現場や知財活動の知見などに触れて視野を広げる機会も設けています。また、Special301やWIPO統計等を読み込んで外国特許ニュースを発信することで、担当領域の知識向上にも取り組んでいます。このように、国際第4委員会では、委員会活動で得た経験・知見を社内へ還元していただけるような取り組みも行っています。

2024年度も、社内外に還元できる委員会活動を意識しつつ、ASEANおよびインドを中心に実務者視点と運用実態にこだわった調査研究を行う予定です。国際第4委員会への引き続きのご支援・ご参加をどうぞよろしくお願いいたします。

2024年5月度 国際第4全体委員会での
松下幸之助歴史館見学の様子

菊地　保貴
Yasutaka KIKUCHI
日本知的財産協会 常務理事
TOPPANホールディングス株式会社
執行役員 知的財産本部長
兼 技術戦略室部長

国際第4委員会は、積極的にインドやASEAN、中東、オセアニア諸国を対象に調査団を派遣して、現地で生の声を聞いて調査研究を行う非常にアグレッシブな委員会だと感じています。「敬う心」と「仲間」を大切にすることを重んじて、ダイナミックな活動に繋げているポテンシャルの高い委員会活動です。他社の経験・知見を吸収出来る機会も多い、本委員会活動に皆さんも新しい「仲間」として参画頂ける事を心待ちにしております。

JIPA通信　2024年度「会員代表の集い」のご案内

「**会員代表の集い**」は、正会員の会員代表の皆さんに、よりJIPAの活動をご理解頂くとともに、相互のネットワーキングの構築を図ることを目的として、昨年度初めて開催しました。当日は約250名の皆さんにご参加頂き、その多くの方々から「是非継続して開催してほしい」というご要望を頂きました。

そこで今年度は**9月20日㈮の13時から、東京・大阪会場**において開催することと致しました。今回は**人材育成**をテーマに、外部講師による**講演**や専門委員会委員長によるJIPA活動を通じた人材育成についてのお話、また**グループディスカッション**などを通じて人材育成のあり方を考えて頂く予定です。

終了後には懇談会を開催致しますので、多くの会員代表の皆さんにご参加頂きたいと思います。詳細な開催通知につきましては、7月中旬頃配信致しますのでご覧下さい。

表紙の写真は…

「北海道大学　ポプラ並木」

パナソニックホールディングス株式会社
知的財産本部 グループ知財戦略部　前川　聡

2023年7月に会誌広報委員会を札幌で開催し、北海道大学の中山一郎先生と意見交換を行いました。北海道大学はJIPAの賛助会員であり、知財界の著名な先生と関係を深められる大変貴重な機会となりました。表紙の写真は、北海道大学の構内にある全長約300mにも及ぶ平成ポプラ並木です。北海道大学は、誰でも構内に入ることができ、多くの自然や歴史的建造物があるため観光名所にもなっています。札幌駅から徒歩圏内ですので、北海道へ旅行する際は皆さんも訪れてみてはいかがでしょうか。ただし、構内ルールにはご注意を。

本誌では、季節感があり、技術、特許、知財に関連がある表紙写真を募集しています。写真と説明文を**会誌広報グループkikansi@jipa.or.jp宛て**にお送りください。また、取り上げて欲しいテーマがあれば、お気軽にご連絡ください。

季刊じば Vol.30
SUMMER 2024
2024年7月15日発行

編集人：　一般社団法人 日本知的財産協会　会誌広報委員会
発行人：　一般社団法人 日本知的財産協会内　上野 剛史
https://www.jipa.or.jp/kikansi/jipa.html
印刷&DTP：　NPC 日本印刷株式会社